

Songs of Innocence の根底に見られる詩想

上 村 忠 実

Songs of Innocence and of Experience は、1794年に出版された際、*Shewing the Two Contrary States of the Human Soul* という副題が付けられた。そのことによって、Innocence, Experience とは、人間の魂の二つの対立する状態のことであり、それがどのような状態であるのかを示すことが出版の意図であることが示された。この作品は、易しい言葉で書かれていて、且つ深い思想が表現されているということで、英文学の中で傑作の一つに数えられている。

この作品については、さまざまな解釈がなされてきたが、この作品を社会との関連においてとらえ、この作品は当時の社会に対する批判であるとするような解釈は妥当であろうか¹。また、副題で「人間の魂の二つの対立する状態を示している」と明示されているにもかかわらず、Innocence, Experience を人間の魂の外にあるものとして解釈したり、二つの関係性を、対立する「状態」としてではなく、移行する「過程」として解釈したりすることは妥当であろうか²。

もちろん、作品は時代の中で生み出されるので、時代を批判する要素は当然含まれている。また、Innocence, Experience をめぐっても、それを人間の成長の過程においてとらえ、無垢なるものとして生まれた人間が、成長するにつれてさまざまな経験を経てけがれていくという解釈は成り立つ。しかし、ブレイクの意図は果たしてそうだったのだろうか。

作品の解釈は自由であるが、詩人の詩想や意図からはずれるような解釈は

いかなものか。この作品をめぐるなされてきた議論や研究の堆積は、改めてブレイクの意図は何だったのか、彼はどのような詩想に基づいてこの作品を制作したのかという根本的な問題へと我々を駆りたてる。

Songs of Innocence and of Experience は、詩と絵による複合芸術作品である。この作品の表紙には、主題、副題とともに、いちじくの葉をつづり合わせて腰を覆っているアダムとエバが描かれている。それはつまり、ブレイクが人間の魂の状態を表現しようとしたとき、彼の詩想の根底に聖書があったということである。そうであるならば、ブレイクの意に沿ってこの作品を解釈するためには、聖書に基づいて解釈する必要があるのではないだろうか。

Songs of Innocence and of Experience は1794年に出版されたが、本当に完成したのは1794年ではない。なぜなら、その段階では、“To Tirzah”が含まれていなかったからである。ブレイクは後年になって“To Tirzah”を制作し、*Songs of Experience* に付加している。“To Tirzah”の付加の年代については諸説あるが³、それが1803年以降であったとするならば⁴、*Songs of Innocence and of Experience* は、出版後、9年以上の歳月が経過してようやく完成したことになる。

では、“To Tirzah”の付加の意義は何だったのか。それは、*Songs of Innocence and of Experience* を、人間、墮罪、イエス・キリスト、十字架、復活、救済、再生、黙示という聖書の説く内容を網羅する段階へと高めるためであったと考える⁵。筆者の論考が正鵠を射ているとすれば、*Songs of Innocence and of Experience* におけるブレイクの詩想の最終的な到達点は、イエス・キリストの死と復活を表現することであったと考えることができる。とするならば、この作品におけるブレイクの詩想の出発点は、イエス・キリストの誕生であったのではないかと考えるのではないだろうか。本稿では、この問題について考えてみたい。

Songs of Innocence and of Experience の出発点は、1789年に出版された *Songs of Innocence* である。ブレイクは、*Songs of Innocence* の出版後、対になるように5年の歳月をかけて *Songs of Experience* を制作し、二冊を合

本の形で上梓した。その際、数編の詩を *Songs of Innocence* から *Songs of Experience* へと移行している⁶。ということは、*Songs of Innocence and of Experience* の原形は、*Songs of Innocence* にあったということになる。なぜなら、数編の詩を移行させたということは、*Songs of Innocence* には、すでに *Songs of Experience* の要素が含まれていたということになるからである。

つまり、*Songs of Innocence and of Experience* という作品は、1789年に出版された *Songs of Innocence* に原形があり、それが展開されて、1794年に *Songs of Innocence and of Experience* となり、最終的に1803年以降に“*To Tirzah*”が付加されたことを以って完成したのである。したがって、原形である *Songs of Innocence* の詩想を明らかにすることは、*Songs of Innocence and of Experience* 全体を理解するうえで意義があると考ええる。

Songs of Innocence は、“Introduction”で始まり、“On Anothers Sorrow”で終わる。ブレイクの詩想を探るうえで、この二編の持つ意義は大きい。ブレイクは、最初に何を提示し、最後に何を結論づけたのか、それがこの二編によって明らかになるからである。

“Introduction”では、*Songs of Innocence* が出版された経緯が歌われている。「私」は歓喜の歌を笛で吹きながら谷を下っていた（“Piping down the valleys wild”⁷）。すると、雲の上に一人の子供が見えた（“On a cloud I saw a child.”）。その子供は子羊についての歌を吹いてと「私」に命じた（“Pipe a song about a Lamb;”）。乞われるがまま、「私」は笛を吹いた。すると、子供は聞いて涙を流した（“So I piped, he wept to hear”）。次に、子供は、笛を捨てて歌ってと命じた。乞われるがまま、「私」は同じ歌を歌った。その間、子供は聞いて、喜んで涙を流した（“While he wept with joy to hear”）。最後に子供は、すべての人が読めるように座って本に書いてと命じた（“Piper sit thee down and write / In a book that all may read—”）。そう言うと、子供は「私」の視界から消えた（“So he vanish'd from my sight.”）。「私」は乞われるがまま、自分の幸せな歌を書いた（“And I wrote my happy songs“）。その目的は、すべての子供が聞いて喜ぶためであった（“Every child may

joy to hear”）。

「私」がブレイクであるとするならば、彼の詩作の目的は、すべての子供が聞いて喜ぶためであったということになる。つまり、この作品の目的は joy ということになる。「私」はブレイクかもしれないし、そうではないかもしれないが、いずれにせよ、*Songs of Innocence* が制作された目的は、喜びのためである。その証拠に、“Introduction”には、喜びを表現する単語がちりばめられている。2行目では、pleasant, glee, 4行目では、laughing, 6行目では、merry, 9行目では、happy, 11行目では、joy, 19行目では、happy, そして20行目では、joy である。

この詩のキーワードは喜びであり、この詩の最終連で歌われている joyこそが、実は *Songs of Innocence* 全体のキーワードである。なぜならば、*Songs of Innocence* の締めくくりとして配置されている最後の詩“On Another's Sorrow”の最終連においても、歌われているのは joy だからである（“O! he gives to us his joy,”）。つまり、*Songs of Innocence* という作品は、joy で始まり、joy で終わっているのである。言わば、この作品は喜びに満ちあふれていて、この作品に一貫して流れている詩想は joy である。では、その joy とは、どのような喜びなのだろうか。

それは、神が人となられたことの喜び、すなわち、イエス・キリストの誕生の喜びであると考ええる。この仮説を前提にしながら議論を進めたい。

ブレイクは、“Introduction”において、「私」は預言者であることを示唆している。雲の上に現れて「私」に命じたあと、「私」の視界から消えた子供とは、詩作のための靈感（インスピレーション）あるいは詩神（ミューズ）であるとも考えられるが、後述する理由から、天使であると考ええる。天使とは、「神に仕えるために、神によって造られた霊的人格を持った存在」⁸である。天使は神に遣わされる存在であるがゆえに、「私」に命じたのは、天使の背後にいる神ということになる。つまり、「私」は神に命じられて詩作したということである。神の命令を受けて書くという姿勢は、旧約聖書の預言者のそれと同じである。

ブレイクは、1803年、*Milton* の制作の経緯について、次のように披瀝している。

I have written this Poem from immediate Dictation twelve or sometimes twenty or thirty lines at a time without Premeditation & even against my Will. the Time it has taken in writing was thus renderd Non Existent. & an immense Poem Exists which seems to be the Labour of a long Life all produc'd without Labour or Study.⁹

ブレイクは、自分自身を旧約聖書の預言者と同格であると見なし、神から命じられるままに、与えられるヴィジョン（幻想）を書き記したと主張しているのである。その姿勢は、*Milton* のような、いわゆる後期預言書においてだけでなく、初期の抒情詩から一貫している。その証左こそ、*Songs of Innocence* の“Introduction”である。「私」は、天使を通して、神から命じられるままに、命じられたことを本に書き記した。それが「私」の姿勢であり、ひいてはブレイクの詩作の姿勢でもあった。トマス・アルタイザーが述べているように、「すでに『無垢のうた』(*Songs of Innocence*)において、イエスの情熱の遍在という幻想が見られる」¹⁰のである。

“Introduction”において、「私」が最終的に命じられたのは、子羊についての歌を書くことであるが、そこに至るまでには、二つの段階を経ている。まず、子羊についての歌を笛で吹くこと、すなわち、メロディーで表現することである。次に、子羊についての歌を歌うこと、すなわち、言葉で表現することである。メロディーから言葉へ移行することによって、歌われている歌の内容やテーマが明らかになる。メロディのみの段階では、曲の雰囲気は伝わるが、その曲が意味する内容までは伝わらない。それに対して、歌詞が付けられた段階では、その歌で歌われている内容やテーマは詳細に伝わる。

歌のテーマは子羊であるが、子羊は、lambではなく、Lambと大文字で表現されている。そのことから、最終的に「私」が命じられたのは、Lamb

of God, すなわち、「世の罪を取り除く神の子羊」¹¹についての歌を書くことであつたことがわかる。つまり、*Songs of Innocence* の主題は、イエス・キリストである。*Songs of Innocence* では、God という単語は使用されているが、Jesus や Christ という単語は使用されていない。この作品では、イエス・キリストは、すべて間接的に、暗示的に、比喩的に、象徴的に表現されている。その象徴的な言語は、丸ごと理解できるか、それとも全然理解できないか、そのどちらかである¹²。

ブレイクは、人間の魂の状態を示そうとしているのに、主題がイエス・キリストであるのはなぜか。

それは、ブレイクが人間をキリスト教の観点からとらえようとしたからである。一般的にブレイクは、正統的なキリスト教からはずれていると見なされているが、彼自身は、“To me who believe the Bible & profess myself a Christian”¹³と述べ、自分の生の拠りどころは聖書であり、自分はキリスト教徒であると考えていた。その彼が人間の魂の在り方を表現しようとする際に、イエス・キリストを主題として掲げた理由は、人間を表現しようとする際に、人間を見ていても、人間の特質は見えなかったからではないかと考える。

例えば、男性の特性を探ろうとする際に、男性を見ていてもその特性は明らかにはならない。男性の特性が明らかになるのは、女性と比較したときである。それと同様に、人間の特質を探ろうとする際に、人間を見ていても、その特質は見えない。人間の特質が明らかになるのは、神と比較したときである。それゆえに、*Songs of Innocence* では、イエス・キリストを示唆する表現がちりばめられているのだと考える。つまり、この作品は、神を主題として掲げることによって、人間の何者たるかを明らかにするという構成になっているのである。その結果として、*Songs of Innocence* では、神と人間の関係が、守る／守られるという関係で表現されている。守るものとしての神、守られるものとしての人間という関係性である。後述するが、この関係性が、比喩的に表現されているのが *Songs of Innocence* の特長である。

前述したように、ブレイクは、暗に自分の詩は旧約聖書の預言者たちが書

いたものに匹敵することを仄めかしているが、*Songs of Innocence* における解釈のカギとなるヴィジョンは、旧約聖書のイザヤのそれと合致していることを指摘したい。“Introduction”では、「私」は谷を下っている。つまり「私」は、もともとは高いところにいたという設定である。これは、「私」が預言者として神の言葉を預かり、伝道者として、神の子羊イエス・キリストの誕生について伝えるべく、神から遣わされることの比喩である。「私」は、高いところ、すなわち天の神の国から、低いところ、すなわち地上へと下っていることを暗示している。このイメージは、旧約聖書の「イザヤ書」に記されている。ブレイクの詩想は、「良い知らせを伝える人の足は、山々の上にあつて、なんと美しいことか」¹⁴に基づいていると考える。ブレイクのヴィジョンでは、「私」は「良い知らせを伝える人」であり、「良い知らせ」とは、*Songs of Innocence* においては、イエス・キリストの誕生である。だからこそ、雲の上の子供は、Lamb についての歌の歌詞を聞いて喜んで涙を流したのである。その涙は、イエス・キリストの誕生を喜ぶ嬉し涙であると考えられる。

では、なぜイエス・キリストの誕生は、*Songs of Innocence* において、喜びとなるのだろうか。それは、「その名はインマヌエルと呼ばれる」¹⁵からである。すなわち、*Songs of Innocence* の根底に見られる喜びとは、「神が私たちとともにおられる」¹⁶喜びである。それは、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」¹⁷と言われるイエス・キリストの臨在の喜びであると考えられる。その理由は、“The Little Boy Found”の3行目“God ever nigh”を引用すれば言を俟たないからである。要するに、“God ever nigh”，すなわち、インマヌエルということが、*Songs of Innocence* を通して見られるブレイクのヴィジョンである。

“Introduction”の内容は、絵としては、Frontispiece to *Songs of Innocence* (plate 2) に描かれている。そこでは、「私」は笛を手に持ち、雲の上の子供を見上げている。「私」は、後方に羊を従えていることから、羊飼いと考えると考えられる。なぜブレイクは、「私」を羊飼いと描いたのだろうか。この問題については、後述するが、一つには、それは、旧約聖書の「詩篇」

に記されている「主は私の羊飼い」という比喩表現を援用したかったからだと考える。前述したように、*Songs of Innocence*では、神と人間の関係は、守る／守られるという関係で表現されているが、その関係性の端的な比喩表現は「主は私の羊飼い」である。ブレイクは、“Introduction”の次の詩“The Shepherd”において、この関係性を読者に明示している。つまりブレイクは、人間を神との関係においてとらえようとしているのである。

以上のように、“Introduction”から、ブレイクの詩想を探るためのいくつかのキーワードを導き出すことができる。それは、喜び (joy)、イエス・キリスト、誕生、守る／守られる関係性、イザヤ書、インマヌエル、羊、羊飼いである。

次に、このキーワードのいずれかが、すべての詩において導き出されることを検証しながら、*Songs of Innocence*がどのように展開していくのかを概観し、どのように結論づけられるのかを探ってみよう。

“The Shepherd”では、羊飼いは、母羊と子羊を見守っている。羊飼いは Shepherd と大文字で表現されていることから、「羊の大牧者」¹⁸であるイエス・キリストの比喩であることがわかる。一方、人間は、「イザヤ書」53章に見られるように、比喩的に迷える羊と表現される。神と人間の関係は、「詩篇」23篇に見られるように、比喩的に羊飼いと羊の関係で表現される。羊の親子を羊飼いが見守るという設定は、人間の親子を神が見守るということの比喩になっているのである。詩の最終行では、“For they know when their Shepherd is nigh.”と歌われていることから、「羊の大牧者」はインマヌエル、すなわち、神我らとともにいます、ということが表現されている。

“The Ecchoing Green”では、子供たちは母親によって見守られ、その背後には老人がいて、老人たちも見守っているという設定になっている。老人たちはオークの木の下に座っている (“Sitting under the oak.”)。オークは、ヨーロッパでは、一般的に木の王者と見なされている¹⁹。オークはイギリスを象徴する木であることも考慮すると、子供たちは国家によって守られていることの比喩となる。また、旧約聖書の「創世記」13章18節に記されている

ように、オークは神を象徴すると考えると、子供たちは、神の守護のもとに
いることが示唆されていると考えることができる。

“The Lamb”では、命は誰によってつくられたのかがテーマとなっている。
この詩は子羊の命について歌われているようであり、実は人間の命についても
歌われていると考えることができる。なぜなら、子羊は、イザヤ書53章に
記されているように、人間の比喩だからである。この詩の結論は、聖書の創
造論に基づいて、命は神によってつくられた、である。神については、「彼」
と表現され、その「彼」は“He became a little child:”と表現されている。こ
れは、神が人となられた出来事、すなわち、イエス・キリストの受肉であり、
その詩的表現である。

“The Little Black Boy”では、母親が子供に、神は太陽に住んでおられる
と教える（“Look on the rising sun: there God does live”）。この意味するところ
は、太陽が時空を超えて変わらないように、「イエス・キリストは、昨日も今日も、
とこしえに変わることがありません」²⁰ということ、すなわち、
神の不変性である。神はいつも変わらず、生きとし生けるものを見守り、そ
れらの必要を与える（“And gives his light, and gives his heat away. / And
flowers and trees and beasts and men receive / Comfort in morning, joy in
the noon day”）。ここでも、joy というキーワードが使用されている。要する
に、ここで歌われているのは、造物主と被造物の守る／守られる関係性である。

この詩では、人間が地上に生まれてくる目的も歌われている（“And we
are put on earth a little space, / That we may learn to bear the beams of
love.”）。それは、「愛の光に耐えることを学ぶため」である。愛と一口で言っ
ても、プラトン、聖書、C.S.ルイス、A. ニーグレン、エーリッヒ・フロム
などが説くように²¹、家族愛、友愛、恋愛、聖愛と、その形態や次元、その
内容はさまざまである。ここでの愛は、太陽に住んでいるとされる神から与
えられる愛であり、その愛が、試練というかたちで人間に与えられることが
歌われている。その愛について、聖書には次のように記されている。「それだ

けではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」²²。“The Little Black Boy”の詩想は、聖書のこの箇所と合致している。

“The Blossom”では、花が雀の喜びとコマドリの悲しみを愛情のまなざしで見守っている様子が歌われている。Blossomは大文字で表現されていることから、この設定もまた、神がいと小さきものを見守っていることの比喩である。聖書では、神のまなざしがいと小さきものにも注がれていることが、次のように表現されている。「五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません」²³。ブレイクの詩想は、聖書のこの箇所にその源泉があると考えられる。この詩で歌われている詩想は、*Songs of Innocence*の締めくくりとなる“On Another's Sorrow”で展開する。その意味で、わずかに12行から成るこの短い詩は、結論のための伏線としてここに置かれていると考えることができる。

“The Chimney Sweeper”では、児童労働で酷使されている煙突掃除の子供たちを天使が解放する（“And by came an Angel who had a bright key, / And he open'd the coffins & set them all free.”）。天使は神から遣わされた存在であり、Angelと大文字で書かれていることから、これは、神が子供たちを解放することの比喩となる。これは神による救済を意味するが、*Songs of Innocence*においては、イエス・キリストの十字架による救済は示されない。それが見られるのは、*Songs of Innocence*に*Songs of Experience*が合本され、“To Tirzah”が付加された段階である。*Songs of Innocence*の段階では、神による救済があることが示されるのみで、その方法は示されないのである。

この詩では、神と人間の関係性についても歌われている。神は人間の父となることが、 “And the Angel told Tom, if he'd be a good boy, / He'd have God for his father & never want joy.”と歌われている。キリスト教の主の祈りでは、「天にまします我らの父よ」と祈られるように、この詩では、

神と人間は父と子という関係で表現されているのである。

“The Little Boy Lost”と“*The Little Boy Found*”では、迷子になっている子供を、神が母親のもとへと連れて行く様子が歌われている。この詩の要となる表現は、先に述べた“*God ever nigh*”である。神は、父親（のような姿）になって、子供を母親のもとへと導く（“*Appeard like his father in white.*”）。この詩においても、インマヌエルの神が表現されていることがわかる。

“*Laughing Song*”では、文字どおり、笑いが表現されている。全12行のうち、7行において、*laugh, laughs, laughing*という単語が使用されている。つまり、喜びが表現されているのである。この詩の結論は、“*Come live & be merry and join with me, / To sing the sweet chorus of Ha, Ha, He.*”である。ここでは、*merry*という単語が使用され、喜びの声を合わせて歌う合唱へのいざないが表現されている。要するに、この詩でもまた、*joy*ということが表現されているのである。

“*A Cradle Song*”では、母親はゆりかごの中で眠る我が子を見守っている。母親は我が子の顔に、赤子として生まれたイエス・キリストの顔をだぶらせている。「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです」²⁴という聖書の言葉をこの詩にあてはめると、母親は、心が清らかな状態であるがゆえに、神を見ていることになる。この詩では、イエス・キリストがすべての人のために赤子となってこの世に誕生し、赤子として泣かれたことが、“*Wept for me for thee, for all,*”と表現されている。そして、ここでもまた、“*When he was an infant small.*”とクリスマスの出来事、すなわち、イエスの誕生が歌われている。

“*The Divine Image*”では、神の徳性（“*these virtues of delight*”）が、人間に内在することが歌われている。聖書の創造論によると、人間は神のかたちとしてつくられた。つまり、人間は神の似姿である²⁵。したがって、

For Mercy Pity Peace and Love,

Is God our father dear:
And Mercy Pity Peace and Love,
Is Man his child and care.

と歌われているように、人間は“Mercy Pity Peace and Love”という神の徳性を受け継いでいるのである。この詩の結論は、“Where Mercy, Love & Pity dwell, / There God is dwelling too.”であるが、ここでは、遍在する神は、国籍や宗教を問わず (“In heathen, Turk or Jew”), 自分と対峙する人の中にもいることが歌われている。これは、聖書に記されている「あなたがたが、これらの私の兄弟たち、それも最も小さな者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです」²⁶に合致する詩想である。

“Holy Thursday”では、守る／守られる関係性が表現されている。聖木曜日にセント・ポール大聖堂に招かれた約六千人の慈善学校の子供たちは²⁷、教会の役員に守り導かれながら大聖堂に入り、礼拝に参加して賛美の声を上げる (“Now like a mighty wind they raise to heaven the voice of song.”)。子供たちは、教会役員に守られ、後援者たちに守られ (“wise guardians of the poor”), 大聖堂に守られ、その背後におられる神に守られているという設定になっている。

“Night”では、夜は、天使によって見守られていることが歌われている。天使が眠れる生きとし生けるものに注ぐのは、祝福と喜び (joy) である。

Unseen they pour blessing,
And joy without ceasing,
On each bud and blossom,
And each sleeping bosom,

天使は、夜行性の肉食動物が飢えのために羊を襲うことに対して、憐れみながら涙を流す (“They pitying stand and weep;”). 天使は、襲われて死ん

だ羊の柔和な霊を受け取り、新しい世界を受け継がせる（“The angels most heedful, / Receive each mild spirit, / New worlds to inherit”）。新しい世界とは、天国のことである。天上の世界は、イエス・キリストの柔和さと、イエス・キリストの健やかさによって、怒りと病が追放された世界である。また、そこはライオンが子羊とともに眠る世界である。

Saying: wrath by his meekness
And by his health, sickness,
Is driven away
From our immortal day.

And now beside thee bleating lamb,
I can lie down and sleep;
Or think on him who bore thy name,
Graze after thee and weep.

前者については、詩想の源泉は、「ヨハネの黙示録」の「もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない」²⁸にあり、後者については、「イザヤ書」の「狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子は、まむしの巢に手を伸ばす。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない」²⁹にある。*Songs of Innocence* の最初の詩“Introduction”では、「私」は谷を下っていたが、「私」は、もともとは、ここでいう「聖なる山」にいて、そこから下りてきていたと考えることができる。

“Night”の最終行では、“As I guard o'er the fold.”と歌われている。地上では、弱肉強食の食うか／食われるかの関係にあったライオンと子羊は、

“New worlds”では、守る／守られる関係性になることが歌われているのである³⁰。

“Spring”では、春を迎える喜びが，delight, Merry, Merrily, joyという単語を用いて表現されている。Merrilyという単語は7回使用されている。また、子供と子羊がじゃれ合う様子が歌われている。春夏秋冬を人生の比喩としてとらえるならば、春は誕生，夏は成長，秋は成熟，冬は死を象徴する。ブレイクは、春を誕生の象徴としてとらえているので、詩の中に登場させているのは、小さなものばかりである。それは小鳥であり、赤子であり、小さな子供である。そのことは、plate 22および23の絵でも表現されている。つまり、“Spring”では、誕生が歌われているのである。

“Nurse’s Song”では、乳母と子供たちが守る／守られる関係にあることが歌われている。乳母は、夕方になって日が沈むので、帰ろうと促すが、子供たちは、まだ明るいので、遊びたいと言う。乳母は、子供たちの願いを受け入れて、もう少しだけ遊ばせることにする。喜んだ子供たちは、跳んで、叫んで、笑う。この詩では、喜びは、最初と最後に表現されている。最初は、“And laughing is heard on the hill”であり、最後は、“The little ones leaped & shouted & laugh’d”である。

この詩で考えなければならないのは、なぜ乳母は子供たちの願いを聞き入れたのかということである。乳母は、子供たちの願いを断ることもできたはずである。それなのに、なぜ聞き入れたのか。それは、乳母が子供たちの立場に立って、子供たちの気持ちに寄り添ったからだと考える。すなわち、乳母は、自分の感情を子供たちの感情と同じにしたのである。換言すれば、乳母は、同情・共感・同感したということである。情を同じにするという詩想は、*Songs of Innocence*の締めくくりとなる“On Another’s Sorrow”で展開する。その意味で、この詩は、結論のための伏線としてここに置かれていると考えることができる。

“Infant Joy”では、タイトルそのものに、キーワードの一つである joy という言葉が付けられている。この詩では、全12行のうち、6行において joy

という単語が使用されている。母親が生後二日の我が子を愛情のまなざしで見つめると、joy 以外には表現のしようがない様子が歌われている。生後48時間の赤子は言葉を発することができないが、母親の愛のまなざしの中では、赤子は "Joy is my name" と言っているように映るのである。

"A Dream" では、守る／守られる関係性が表現されている。この詩は、「私」が夢の中で見た話であるが、夢は、天使によって守られているベッドでみたという設定になっている ("O'er my Angel-guarded bed")。つまり、「私」は天使に守られている、ひいては神に守られているという前提である。

一匹の母親アリが、夜の暗闇の中で道に迷って途方に暮れている。母親アリは、我が子を心配して絶望の声を発する。「私」はその声を耳にする ("All heart-broke I heard her say.")。「私」はかわいそうに思い、涙を流す ("Pitying I drop'd a tear:")。すると、母親アリに救済の道が拓かれる。すなわち、蛍が母親アリに近づいてきて、道を照らし、カブトムシの羽音について、早く家に帰るようにと言うのである ("Follow now the beetle's hum, / Little wanderer, hie thee home.")。

夢の内容を比喩的に解釈すれば、道に迷っている小さなアリとは、迷える子羊と同様に、人間の比喩であり、救いをもたらす蛍とカブトムシは、神の比喩ということになる。蛍の光については、「イザヤ書」9章2節の「闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る」や「ヨハネの福音書」1章4-5節の「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」から、神の比喩であることを導き出すことができる。一方、カブトムシは、アリの目には、大いなる堅固な岩として映ると考えられることから、「イザヤ書」26章4節の「主は、とこしえの岩」と表現される神の比喩として読むことができる。

この詩の要点は、13行目の "Pitying I drop'd a tear:" である。なぜなら、この詩行を境にして救いがもたらされるからである。つまり、救いをもたらすカギとなっているのは、憐れんで涙を流すこと、すなわち、同情・共感・同感である。この「情を同じにすること」は、次の詩 "On Anothers

Sorrow”のテーマとなっている。

以上のように、“Introduction”以降の詩を概観しながら検証してみると、すべての詩において、“Introduction”で導き出したいずれかのキーワードが詩想として表現されていることがわかる。しかしもちろん、“Introduction”では提示されていない詩想もある。それを拾い出して列挙してみると、創造論に基づく命の創造、被造物として生まれてくる目的、神による救済、神と人間の関係性、“Mercy, pity, peace and love”という神の徳性、その神の徳性が人間に内在すること、そして、同情・共感・同感である。

ブレイクは、*Songs of Innocence* をどのように締めくくっているのだろうか。最後に、“On Anothers Sorrow”を以って総括したい。

この詩は9連で構成されていて、各連は4行、全36行である。人は、他人の悲しみに対して、どのように接するのか。その接し方によって、その人の心の在り方がわかる。人は、他人の悲しみに対して、同情・共感・同感する場合もあるし、無関心のままだいる場合もある。見て見ぬふりをする場合もあるし、嘲笑する場合もある。

この詩では、他人の悲しみに対して、同情・共感・同感する心の在り方が歌われている。それがInnocenceの心の状態であるとブレイクは結論づけているのである。この詩では、Canで始まる修辞疑問文が使用され、他人の悲しみに対して、同情・共感・同感しないことがあり得るだろうかと問うている。第1連では、「私」を主語にして、第2連では、父と子との関係において、第3連では、母と子との関係において、反語を用いて問うたあと、そのようなことはあり得ないと結んでいる。つまり、同情・共感・同感するということである。

Can I see others woe,
And not be in sorrow too.
Can I see others grief,
And not seek for kind relief.

Can I see a falling tear,
And not feel my sorrows share,
Can a father see his child,
Weep, nor be with sorrow fill'd.

Can a mother sit and hear,
An infant groan an infant fear—
No no never can it be.
Never never can it be.

第1連および第2連の前半における「私」の心の在り方は、“A Dream”においてカギとなっている“Pitying I drop'd a tear:”に見られる「私」の心の在り方を読者に想起させるであろう。

ここで、同情・共感・同感ということについて、少しく考えてみよう。日本語で同情すると言うと、上からの目線でかわいそうな人を見くだすというようなニュアンスがある。したがって、同情することは良くないという考え方もある。ブレイクが *Songs of Innocence* を通して言っているのは、見くだすというようなことではなく、情を同じにすることである。それは、英語の sympathy に相当する。この単語は、ギリシャ語から英語になった単語で、sym + pathos で構成されている³¹。原義は、「共に (sym) 苦しむ (path) こと (y)」³²である。

Songs of Innocence では、sympathy は pity として表現されている。Pity は、“The Divine Image”において、“Mercy, Pity, Peace and Love”と、神の徳性 (“virtues”) の一つであることが歌われている。そして、その徳性は人間に内在することが歌われている。Pity は神の徳性であるがゆえに、神から遣わされる天使にも内在している。その例は、先に示した“Night”の26行目“‘They pitying stand and weep;”において見られる。

つまりブレイクは、pity について、神の徳性であることを“The Divine

Image”で示し、天使に内在することを“Night”で示し、人間に内在することを“The Divine Image”と“A Dream”および“On Anothers Sorrow”で示しているのである。

“On Anothers Sorrow”の第3連、第4連、第5連では、「彼」が主語になる。この「彼」は、イエス・キリストである。それは、後述するが、第7連の2行目で明らかにされる。この三つの連では、「彼」はすべてのものに目をとめておられること、特に、小さなものに目をとめておられることが歌われている。それは、小鳥であり、赤子である。「彼」は小鳥の悲しみ、嘆き、心配を、そして、赤子の苦悩を憐れまれる（pity）、すなわち、同情・共感・同感（sympathy）される。「彼」は、巣にいる小鳥に憐みを注ぎ、ゆりかごに眠る赤子に涙を流される。そして、すべてのものの涙をぬぐってくださる。

And can he who similes on all
Hear the wren with sorrows small,
Hear the small birds grief & care
Hear the woes that infants bear—

And not sit beside the nest
Pouring pity in their breast
And not sit the cradle near
Weeping tear on infants tear.

And not sit both night & day,
Wiping all our tears away.
O! no never can it be,
Never never can it be.

「彼」が巣の小鳥を見守る様子は、“The Blossom”において、花が小鳥

を見守る様子を、そして、“Night”の第3連において、天使が巢に眠る小鳥を見守る様子（“They look in every thoughtless nest, / Where birds are coverd warm;”）を読者に想起させるであろう。また、ゆりかごの赤子を見守る様子は、“A Cradle Song”において、母親が赤子を見つめるまなざしを想起させるであろう。第5連の2行目に見られる“pity”については既述したので割愛するが、以上のように、“On Anothers Sorrow”では、まかれていた伏線が回収されているのである。

第6連の2行目“Wiping all our tears away.”という表現は、キリスト教の文脈の中では、新約聖書の「ヨハネの黙示録」に記されている「新しい天と新しい地」³³を読者に想起させる。すなわち、「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってください」³⁴。この詩想は、先に述べた“Night”における“New worlds”の描写を読者に想起させるであろう。つまりブレイクは、*Songs of Innocence*の詩想において、旧約聖書の最初の「創世記」の人間の創造から、新約聖書の最後の「ヨハネの黙示録」の「新しい天と新しい地」までを網羅していることになる。

“On Anothers Sorrow”では、第1連から第3連までと、第4連から第6連までの構成は同じであるが、第7連から第9連までは構成が異なっている。すなわち、修辞疑問文は使用されず、反語的な表現とはなっていない。

第7連では、「彼」は、すべてのものに彼の喜びを与えることが歌われている。この詩行と第9連の1行目では、joyというキーワードが繰り返されている。2行目では、「彼」は赤子になられたことが歌われている。この詩行から、「彼」はイエス・キリストであることがわかる。この詩行は、既述したように、*Songs of Innocence*において、繰り返して歌われている詩行である。その詩行が、締めくくりとして、この詩集の最後に、もう一度、繰り返して歌われていることから、イエス・キリストの誕生こそ、この詩集の主題であると考えられる。3行目では、「彼」は「イザヤ書」に記されている苦難

の僕の姿で歌われている。すなわち、「彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた」³⁵である。「彼」は「悲しみの人」であったからこそ、生きとし生けるものの悲しみを感じてくださることが4行目で歌われている。

He doth give his joy to all.
He becomes an infant small.
He becomes a man of woe
He doth feel the sorrow too.

第8連で歌われているのは、これまで繰り返されてきた詩想、すなわち「インマヌエル」、「神が私たちとともにおられる」である。既述したが、その詩想は、“The Little Boy Found”において、“God ever nigh”と端的に表現されている。ここで着目すべきは、“thy maker”という表現がなされていることである。神と人間は、造物主と被造物の関係にあることが、再び繰り返して表現されている。すなわち、*Songs of Innocence* は、最後に再び人間の何者たるかを示したうえで、結論として、「インマヌエル」を読者に想起させる構成になっているのである。

Think not, thou canst sigh a sigh,
And thy maker is not by.
Think not, thou canst weep a tear,
And thy maker is not near.

最終連で歌われているのも、joyと「インマヌエル」である。1行目は、第7連1行目の繰り返しであり、「彼」はjoyを与える存在であることが強調されている。それは、“our grief”を打ち破るためである。では、“our grief”を打ち破ってもらった者たちは、「彼」に対して何をするのか。その

答えは、“The Divine Image”の3-4行目で歌われているように感謝を返すのである（“And to these virtues of delight / Return their thankfulness.”）。換言すれば、それは神に賛美をささげるということである。それは、例えば、「主の喜びが／心にあれば／悲しみは笑いに／苦しみは喜びに／嘆きは踊りに／すぐに変わる」³⁶に見られるような神賛美である。3-4行目の詩想は、「インマヌエル」であるが、悲しみが消え去るまで、「彼」は私たちのそばに座って呻かれるというのは、換言すれば、「彼」は私たちを見捨てないということである。この詩想は、「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません」³⁷に源泉がある。それは、例えば、「すくいぬしイエスは（主は捨てたまわじ）」³⁸に見られるような神賛美である。つまり最終連は、1行目の“O!”の感嘆で示されているように、「彼」が彼の喜びを私たちに与えてくださることに感嘆し、与え主である「彼」を賛美して締めくくっているのである。

O! he gives to us his joy,
That our grief he may destroy
Till our grief is fled & gone
He doth sit by us and moan

ブレイクは最終連において、喜びと悲しみの両方を歌っているが、これを sympathy と合わせて考えると、*Songs of Innocence* におけるブレイクの主張は、「喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい」³⁹という聖書の言葉に収斂する。

以上が、*Songs of Innocence* の根底に見られる詩想である。総括すると、「私」は雲の上の天使の命令を受けて、預言者として、また、牧者として、子羊についての歌を歌ってきた。羊飼いである「私」は、子羊についてのエッセンスを詩と絵で披瀝した。そうして、joy を与える「彼」を賛美して詩集を締めくくった。そのエッセンスについては、キーワードを以って示したので、ここでは繰り返さない。

最後に、そもそも歌い手である「私」が羊飼いと設定されている理由をもう一つ考えてみよう。

もちろん、その理由は、“Introduction”に続く詩において、子羊に重ねて「神の子羊」を歌うためであったと考えられる。しかし筆者は、そのもう一つの理由は、ブレイクが *Songs of Innocence* の構成を、聖書の枠組みになぞらえたかったからではないかと考える。羊飼いであり、歌い手である「私」の行為は、聖書の文脈では、イエス・キリストが誕生した際の羊飼いの行為だからである。ブレイクは、イエス・キリストの誕生を告げ知らされた羊飼いの言動を、*Songs of Innocence* の歌い手である「私」の言動に以下のように符号させたのである。

聖書によると、「さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた」⁴⁰。歌い手である「私」が雲の上に子供を見たことは、この記述に準拠している。天使は羊飼いである「私」に顯れたのである。

2点目に、雲の上の子供によって、「私」が子羊についての「喜び」の歌を歌うように命じられたのは、次の記述に準拠している。すなわち、「御使いは彼らに行った。『恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。』」⁴¹。羊飼いは、神の子羊イエス・キリストの誕生の喜びを告げられたのである。

3点目に、雲の上の子供が、「私」の視界から消えたことは、「御使いたちが彼らから離れて天に帰った」⁴²ことに準拠している。

4点目に、「私」が“Introduction”以降の詩を歌い続けたのは、「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて」⁴³来たことの結果であると考えられる。なぜなら、*Songs of Innocence* にちりばめられているのは、イエス・キリストの誕生の喜びだからである。

最後に、“On Anothers Sorrow”において、joy と「インマヌエル」が歌われ、「彼」が賛美されているのは、「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」⁴⁴に準拠している。

以上を総合すると、歌い手（語り手）としての「私」の行為は、イエス・キリストの誕生を告げ知らされた羊飼いの行為になぞらえられていることがわかる。その目的で、ブレイクは、歌い手の「私」を羊飼いとして描いているのである。羊飼いである「私」が *Songs of Innocence* の中で歌ったのは、イエス・キリストの誕生の喜びである。「私」の歌うという行為は、聖書の文脈で言えば、「わたしの喜びがあなたがたのうちであり、あなたがたが喜びで満ちあふれるように、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました」⁴⁵ということになる。

ブレイクは、作品の構成を聖書の枠組みに準拠させ、歌い手の「私」を羊飼いとして設定し、歌う内容を聖書の記述と合致させながら、神の子羊による joy と「インマヌエル」を歌った。それが、*Songs of Innocence* である。したがって、この作品の根底に見られる詩想は、イエス・キリストの誕生に収斂する。

注

¹ Cf. Bernard Blackstone, *English Blake* (Cambridge University Press, 1949).

² 松島正一編『ブレイク詩集』（岩波文庫、2004年）、330頁参照。

³ G. E. Bentley は *Blake Books* (Oxford Clarendon Press, 1969), p.380において、1797年と推定。Geoffrey Keynes は *Blake: Complete Writings* (Oxford University Press, 1966), p.220において、1801年頃と推定。Alicia Ostriker は *William Blake: The Complete Poems* (Penguin Books, 1977), p.889において、1803年以降と推定。P. H. Butter は *William Blake: Selected Poems* (London: Dent, 1982), p.210において、1804年頃と推定。W. H. Stevenson は *The Poems of William Blake* (Longman, 1971), p.590において、1804-05年または1809年以降と推定。R. B. Kennedy は *Blake: Songs of Innocence and of Experience, and Other Works* (Collins, 1970), p.190において、1805年以降と推定。Mary Lynn Johnson & E. Grant は *Blake's Poetry and Designs* (Norton, 1979), p.58において、1805年後半以降

と推定。

⁴ David V. Erdman, *The Complete Poetry and Prose of William Blake* (University of California Press, 1982), p.800および Andrew Lincoln, *Songs of Innocence and of Experience* (Tate Gallery, 1991), p.200.

⁵ 拙論「“To Tirzah”の付加の意義をめぐって」『福岡女学院大学紀要』第8号(1998年)参照。

⁶ 梅津濟美『ウィリアム・ブレイクの研究』(垂水書房, 1963年)のIV. Transferred Songs参照。

⁷ 本論中のブレイクの詩の引用は、すべて上記のErdman, *The Complete Poetry and Prose of William Blake*による。

⁸ 『新改訳聖書 注解・索引・チェーン式引照付』改訂新版(いのちのことは社, 2005年), 新約159頁。

⁹ Erdman, pp.728-29. Letter to Thomas Butts, 25 April, 1803.

¹⁰ トマス・アルタイザー, ウィリアム・ハミルトン(小原信訳)『神の死の神学』(新教出版社, 1969年), 272頁。

¹¹ 「ヨハネの福音書」1章29節。本論中の聖書の引用は、すべて『聖書 新改訳 2017』(いのちのことは社, 2017年)による。

¹² Cf. Kathleen Raine, *Poetic Symbols as a Vehicle of Tradition* (Eranos-Jahrbuch, 1968), p.152.

¹³ Erdman, p.614. Annotation to *An Apology for the Bible*, Letter I, p.5.

¹⁴ 「イザヤ書」52章7節。

¹⁵ 「マタイの福音書」1章23節。

¹⁶ 「マタイの福音書」1章23節。

¹⁷ 「マタイの福音書」28章20節。

¹⁸ 「ヘブル人への手紙」13章20節。

¹⁹ Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing Company, 1984), p.347.

²⁰ 「ヘブル人への手紙」13章8節。

²¹ プラトン(森進一訳)『饗宴』(新潮文庫, 昭和43年), C. S. ルイス(佐柳文男訳)『四つの愛』(新教出版社, 2011年), A. ニーグレン(岸千年, 大内弘助訳)『アガペーとエロース』(新教出版社, 1954年), エーリッヒ・フロム(鈴木晶訳)『愛するということ』新訳版(紀伊國屋書店, 1991年)参照。

²² 「ローマ人への手紙」5章3-5節。

²³ 「ルカの福音書」12章6節。

²⁴ 「マタイによる福音書」5章8節。

- ²⁵ 「創世記」1章26-27節参照。
- ²⁶ 「マタイの福音書」25章40節。
- ²⁷ 松島, 54頁。
- ²⁸ 「ヨハネの黙示録」21章4節。
- ²⁹ 「イザヤ書」11章6-9節。
- ³⁰ “Night”については、拙論「英詩における病」『病』テーマ・シンキング叢書011（ミッションプレス, 2021年）参照。
- ³¹ 竹林滋編『新英和大辞典』第6版（研究社, 2002年）, 2489-90頁。
- ³² 南出康世編『ジーニアス英和辞典』第5版（大修館書店, 2015年）, 2110頁。
- ³³ 「ヨハネの黙示録」21章1節。
- ³⁴ 「ヨハネの黙示録」21章3-4節。
- ³⁵ 「イザヤ書」53章3節。
- ³⁶ 能城一郎「主の喜びが心であれば」（Michtam Praise & Worship, 2020）。
- ³⁷ 「ヨハネの福音書」14章18節。
- ³⁸ 和田健治『聖歌』（総合版）657番（聖歌の友社, 2002年）（「聖歌」1958年版では、612番）。
- ³⁹ 「ローマ人への手紙」12章15節。
- ⁴⁰ 「ルカの福音書」2章8-9節。
- ⁴¹ 「ルカの福音書」2章10-11節。
- ⁴² 「ルカの福音書」2章15節。
- ⁴³ 「ルカの福音書」2章15節。
- ⁴⁴ 「ルカの福音書」2章20節。
- ⁴⁵ 「ヨハネの福音書」15章11節。

